

[研究室だより]

研究室を訪れた人々 1999年度

沼野充義 他

研究室を訪れる様々なお客さんについての簡単な備忘録のつもりで始めたこの欄だが、幸い、訪問者の流れは途切れることなく、今年も盛りだくさんの内容を記すことができる。これもひとえに、関係各位のご理解・ご協力のおかげであり、お世話になった方々や講師として特別講義をしてくださったお客さんの方々に改めて心から感謝させていただきたい。

なお、最近では、向こうからこちらにやってくる流れだけでなく、こちらから向こうに行く流れもかなり強くなってきている。いまやロシアに留学することは特に珍しいことではなく、向こうの大学で正式に学位を取得したり、向こうの学会で研究報告をしたりというケースも徐々に出るようになってきた。こういった流れを絶やすことなく、今後のいっそうの学術交流の発展を目指して努力を続けていきたいと思う。

(沼野充義)

特別講義「1930年代のルカーチとシクロフスキー」(ロシア語)

講師 ガリン・ティハーノフ博士 (オックスフォード大学マートン・コレッジ
研究員)

於 スラヴ語スラヴ文学研究室

日時 1999年7月6日

ガリン・ティハーノフ (Galin Tihanov) 氏は、1964年生まれ、ブルガリア出身の文学研究者。欧米では主にバフチン専門家として知られているが、その他にもブルガリア文学、比較文学、観念史などの分野で幅広く活躍する若手の文学理論家である。今回は大阪大学のヨコタ村上孝之氏のご紹介により、来日中のティハーノフ氏に時間を割いていただくことが可能になった。講義の後は、例によって本郷界限に繰り出し、酒の席で文学談義がロシア語と英語で盛り上がった。若手の、本当にいま現在新しい仕事を生み出しつつある研究者とこのように直接交流を持つのは、われわれの大学院生たちにとっても最高の刺激であろう。なお、その後、2000年4月に沼野が受け取ったEメールの“good news”によれば、ティハーノフ氏は、2000年10月よりランカスター大学のヨーロッパ研究講座の講師となることが決まり、文化理論入門、ヨー

ロッパのアイデンティティの観念、ヨーロッパ・ロマン主義の文化、という3つの(いずれも優れてインターティシプリナリーな性格の)授業を受け持つ予定とのこと。

ティハーノフ氏の印象について、当日出席したバフチン研究者である野中進氏(埼玉大学助教授)に以下のような感想を寄せていただいた。

ガリン・ティハーノフ氏を迎えて

ガリン・ティハーノフ氏はブルガリアの出身で、現在はオックスフォード大学のマートン・カレッジで特別研究員(junior research fellow)を勤めている。ソフィア大学とオックスフォード大学で博士号を取り、すでにブルガリア文学についての著作も出しているという、たいへんな秀才である。

講義題目は「1930年代のルカーチとシクロフスキー」というものだった。アルヒーフ資料にもとづいて、二人の文芸批評家の知られざる交錯を論じた刺激的なものだった。1933年から1945年までソ連に亡命していたルカーチは、三十年代半ばに歴史小説にかんする著作を執筆したが、その原稿についていわゆる「内部批評(vnutrennjaja retsenzija)」を担当したのがシクロフスキーだった。この批評家独特のレトリックと論理を読み解きながら、ティハーノフ氏は、当時シクロフスキーが置かれていた政治的あるいは文学的状況の再現を試みた。

ちなみに「内部批評」についてはよく知らなかったのだが、たとえば『文学遺産』シリーズのブリューソフの巻(v. 85)などにも、この詩人が担当した「内部批評」のいくつかが載せられている。それを読むと、けっこう微妙なことも書いてある。今後、アルヒーフからこの種の資料がますます多く発見されるだろうが、その「使い方」はそれなりの工夫をしないと、ただの暴露に終わるだろう。もちろんティハーノフ氏はその点もよく考えているようだった。

彼は予想した通りの秀才だったが、穏和で気さくな話しぶりも印象的だった。そして何より律儀な人であった。どれくらい律儀かというと、今度「来訪記」を書くからと本人にメールを出したところ、さっそく返事が来て「日本の印象」なるものを書き送ってくれた。原文のまま引いておく。

" My first visit to Japan was very fruitful. I had a lively and stimulating exchange with academics in Osaka, Nara, Kyoto, and Tokyo; the people I met were invariably kind and helpful. I wish to thank in particular Professor Murakami from Osaka University and Professor Numano from Tokyo University for organising my lectures and for their hospitality as well as the faculty and the graduate students at the Department of Russian in Tokyo University for their thoughtful and engaging comments on the lecture I gave there. I keep very fond memories from my trip and from the conversations with my Japanese colleagues and

friends.”

また、バフチンとルカーチに関する彼の本が2000年6月ごろ出るそうである。

(野中進)

特別講義「『罪と罰』のプロット」(ロシア語)

講師 ロバート・ベルナップ氏 (コロンビア大学教授)

於 スラヴ語スラヴ文学研究室

日時 1999年10月12日

ロバート・ベルナップ Robert Belknap 博士は、コロンビア大学スラヴ語学文学科の教授を長年つとめ、特にドストエフスキーの専門家として世界的に高名なロシア文学者(なおこの姓は英語では k の文字がサイレントになるため「ベルナップ」と発音される)。主著に *The Structure of The Brothers Karamazov* (Mouton, 1967; Reprinted by Northwestern University Press, 1989), *The Genesis of The Brothers Karamazov* (Northwestern University Press, 1990) などがある。1999年度にベルナップ博士は、北海道大学スラブ研究センターの外国人研究員となった奥様の Cynthia Whittaker 教授(ロシア史)に同伴して、コロンビア大学から休暇を取って来日した。今回の講義は北海道大学スラブ研究センター教授・望月哲男氏のご配慮によって実現したものである。

講義をベルナップ教授の母語である英語でしていただくか、あるいはロシア語でしていただくか、最後まで迷ったのだが、結局、ベルナップ教授がわれわれの英語力の限界を見越して、ロシア語で行なうと申し出てくださった。講義はドストエフスキーの小説についてだけでなく、小説のプロットに関する一般理論まで含む極めて刺激的なものだった。講義後の懇親の席で、ベルナップ氏は「ロシア語も英語も同じ言語の方言どうしのようなものだ」とある学生に言って驚かせたとか。欧米人のヨーロッパ文学に対する姿勢がわれわれと根本的に違うことを、改めて思い知らされた。

国際シンポジウム ユートピアの後に芸術は可能か?

——ポスト共産主義時代の文化と思想—— (国際交流基金 助成事業)

日時 1999年10月15日(土) 午後3時—6時

場所 東京大学法文1号館

基調報告および作品の朗読

ドミトリー・プリゴフ(詩人・美術家) / ウラジーミル・ソローキン(作家)

コメンテーター

ナージャ&ヴァレーラ・チェルカーシン夫妻（美術家）

亀山郁夫（東京外国語大学教授・ロシア文学）

望月哲男（北海道大学スラブ研究センター教授・ロシア文学／現代文化理論）

特別メッセージ ボリス・グロイス（芸術理論家・哲学者）

企画・司会 沼野充義（東京大学助教授）

1970年代以降、旧ソ連の「アンダーグラウンド」で非公認芸術家・文学者として活動し続け、現代のロシアで芸術の最前線に踊り出て国際的な脚光を浴びている詩人・美術家のドミトリー・プリゴフ氏と、いまや現代ロシア文学の最先端で活躍し、多くの外国語に翻訳され、国際的に注目されている小説家ウラジーミル・ソローキン氏を基調報告者として迎えてのシンポジウム。報告・作品の朗読・討論を通じて、ユートピアという「大きな物語」が崩壊したあとの現代世界における芸術の可能性、そして現代世界が直面している文化・思想上の問題を検討した。

なお、この国際シンポジウム開催にあたっては、国際交流基金から助成をいただいたほか、東京外国語大学総合文化研究所（亀山郁夫氏）・北海道大学スラブ研究センター（望月哲男氏）・水戸芸術館（逢坂恵理子氏）のご協力を得た。関係各位に深く感謝したい。もともとプリゴフを日本へ招聘しようという話は、イリヤ・カバコフをメイン・ゲストとする別の国際シンポジウムに彼にも出席してもらおうということから持ち上がった話であり、われわれの国際シンポジウムの発想じたい、1999年8月に開幕した水戸芸術館のイリヤ・カバコフ展「シャルル・ローゼンタールの人生と創造」に合わせて生まれたものである。

シンポジウムはすべてロシア語・通訳なしで行われたうえ、テーマ自体がかなり「先鋭的」なものだったにも関わらず、会場には約50名の熱心な聴衆が集まり、熱気のある議論が展開した。なお、このシンポジウムに合わせて、初来日のプリゴフ氏を紹介するための小冊子「えりぬきのプリゴフ」（49ページ）を作成した。

このシンポジウムについては、別途、イリヤ・カバコフとモスクワ・コンセプチュアリズムの研究に携わっている鴻野わか菜さん（大学院博士課程、現在モスクワのロシア国立人文大学留学中）に参加記を書いていただいた。

特別講義（布施学術講演会）

「作家と自殺—ロシアと日本の場合に即して」（講義は日本語）

講師 グリゴーリイ・チハルチシビリ氏

日時 1999年11月8日（月）

場所 東京大学法文1号館113番教室

東京外国語大学創立百周年記念国際シンポジウムに参加するために来日したグリゴーリイ・チハルチシビリ Григорий Чхартишвили 氏に、この機会を利用して、東京大学でも特別講演をお願いすることができた。これは東京外国語大学の亀山郁夫氏のご配慮による。テーマがテーマだけに、会場にはロシア関係以外の聴衆もかなり混じり、質疑応答も様々な視点からのたいへん興味深いものになった。

チハルチシビリ氏は、現代ロシアで最も影響力の大きな月刊文芸誌の一つ『外国文学』誌の副編集長の要職を務めるかたわら、現代日本文学研究者・翻訳者として活躍し、特に三島由紀夫の優れたロシア語訳で知られている。同氏はさらにロシア文学や広く世界文学を視野にいれた批評の分野でも優れた仕事をし、そのいくつかは日本語にも訳され、『新潮』などの文芸誌に掲載されているが、最近『作家と自殺』という浩瀚な研究書をモスクワで上梓した。この本はこれまでロシアに類書がまったくなかったものとして大きな反響を呼び、1999年度ロシア・ブッカー小賞候補にもノミネートされた。今回の講演は、この著書の内容に基づき、特にロシアと日本の作家の例を取り上げて比較文学的な見地から行なっていただいた。

なおチハルチシビリ氏の著作活動は非常に幅広く多面的であり、1998年来ロシアの読書人の間でとみに評判が高まっている、正体不明の謎の純文学ミステリー作家B.アクニンがじつはチハルチシビリ氏であったことが最近明らかにされたばかりで、いまや同氏はロシア文壇の新しいスターとして国際的にも注目の的となりつつある。『作家と自殺』も、アクニン名義の推理小説も現在邦訳が準備中である。

講演の日本語原稿の準備に際しては、大学院博士課程の今田和美・守屋愛さんに協力していただいた。この講演のロシア語原文は『SLAVISTIKA』の本号に全文を掲載し、日本語訳は別途、沼野充義編『とどまる力と越え行く流れ——多分野交流演習論文集』に掲載する。

なお、この講義に合わせて、小冊子『チハルチシビリ読本——日本語で読めるグリゴーリイ・チハルチシビリのエッセイ集成』(27ページ)を作成した。

特別講義 「語学的文体論と談話文法——ロシア語・英語・日本語の例に基づいて」(講義は日本語)

講師 UCLA 教授 オリガ・T・ヨコヤマ博士

日時 2000年2月3日(木)

場所 スラヴ語スラヴ文学演習室

元ハーバード大学スラヴ言語学教授、現在UCLA（カリフォルニア大学ロサンジェルス校）教授のオリガ・T・ヨコヤマ博士が一時来日されることになり、この貴重な機会を利用して、特別講義をお願いした。20人も入れればいっぱいになるわれわれのこじんまりとした演習室には思いがけず40名以上もの聴衆がつめかけ、「東大ではスラヴ言語学に対して関心が高い」(?)と、ヨコヤマ教授自身を驚かせるほどだった。この講義については、大学院博士課程の福安佳子さんに感想を書いていただいた。

オリガ・ヨコヤマ教授を迎えて

オリガ・ヨコヤマ氏は、現在カリフォルニア大学（UCLA）スラヴ言語・文学科教授。79年にハーバード大学で博士号を取得の後、95年まで同大学で教鞭を取られた。氏はロシア語と日本語を母国語とし、英語も母国語並に操る trilingual であるが、その専門分野は幅広く、ロシア語統語論、形態論、音韻論、意味論、古代ロシア語、スラヴ民族学にまで及ぶ。特に談話文法の権威として知られる世界的に著名なスラヴ言語学者である（主著 *Discourse and Word Order*, Benjamins: 1986）の他、数多くの編著・専門的論文がある。業績等について詳しくは、UCLAのホームページ <http://www.humnet.ucla.edu/humnet/slavic/slavic.html> を参照のこと。

今回は「文体論と談話文法」と題して御講義をいただいた。日本語、ロシア語、英語を例にとりながら、未発表の新説、「文体論は科学的言語学の中の談話文法に他ならない」をセンセーショナルに御発表くださった。演習室はスラヴ語、スラヴ文学関係者のみならず、ハルビン生まれの氏の生い立ちがいざなったハルビン学院関係者も加わり、熱気にあふれていた。氏の言語分析の手法には言うまでもなく、美しい日本語、ロシア語、英語そして何よりもその気品と迫力に魅了された2時間であった。

今回のオリガ・ヨコヤマ氏の講義の実現は、ミレニアムを記念した氏の個人的な来日の機会を捉えたことによる。日本での学生時代、アルバイトでロシア語を教えておられた当時の学生さんたちと、「2000年の2月2日の2時にニコライ堂で会いましょう」と言葉を交して別れた、その約束を果たすための来日であったという。氏はその約束の実行とともに、四半世紀にわたってアメリカ言語学の中で培ってきた独自の言語分析の手法を、日本のスラヴ語学研究の土壌にすがすがしいシャワーのように示して帰国なさった（2月4日には東京外国語大学に於て「ロシア語とジェンダー」と題する講義がおこなわれた）。じっくりと種蒔の時間があつたらと感じたのは、シャワーを浴びた側だけのことではなかっただろう。（福安佳子）